

子どもが輝く「学び」の創造：つながりを育むコミュニケーション術

古賀, 倫嗣
熊本大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/1933261>

出版情報：生活体験学習研究. 16, pp.79-80, 2016-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『子どもが輝く「学び」の創造 — つながりを育むコミュニケーション術 —』

桑原 広治 著



著者の桑原広治さんは、1954年、熊本県人吉市生まれ。熊本県球磨地域の小学校を中心に教職生活を送り、2015年定年退職後、現在、佐賀女子短期大学教授を務めておられる。

本書は、2007年、学校という生活の場の中で日常的に起きるコミュニケーションの問題事象に関して、「コミュニケーション研究20年」の成果を取りまとめた『教育の場で、なぜ、コミュニケーションがうまくいかないのか』（あいり出版）に続き、著者にとって、2番目の単著として2015年に刊行された。では、この8年間でどのように研究を発展されたのであろうか。

著者は、前著において「教育コミュニケーション」を「教育にかかわる者が問題意識をもち、相手の話をしっかりと聞き、自分の言いたいことを正確に『伝え』つつ、相手にもこの人こそ『伝えたい』と感じてもらえるような話し方を身につけ、見えないものを見える形にしていく双方向のコミュニケーション」と定義していた（同書、6ページ）。本書との違いを端的にまとめておくと、前著ではコミュニケー

ション研究といいながら「話す力」に特化したアプローチであったのに対し、本書は「聞く力」の重要性に着目、さらに「聴く力」という言葉に修正し、「メタ認知」の科学的理論からの説明を加えたことが大きな変化であり、本書を貫くコミュニケーション研究者としての主張である。

本書の構成を示しておこう。

第1章 コミュニケーション力と学校の役割

1. 子どもたちの現状とコミュニケーション力の意味
2. コミュニケーション力をつくる支持的風土と聴く力

第2章 「支持的風土」のなかで「学び合う」すばらしさ

1. 子どもの力を引き出す支持的な風土
2. 「話型」と「ファシリテーション」は車の両輪

第3章 子どもが輝く「学び」をめざす教師の研修

1. 教師の話し方は子どもの話す力を育てる
2. 教師力を高める校内研修

第4章 子どもが輝く「学び」づくりの実際

1. コミュニケーション力を育む授業
2. コミュニケーション力を支える活動

第5章 地域コミュニティで育てるコミュニケーション力

1. 保幼・小・中連携教育とコミュニケーション
2. 家庭と地域で育てるコミュニケーション力

小学校教員であり、教頭という管理職を務めた著者は、いつも、学校という生活場面の中の「つながり」から問題の思考をスタートさせる。子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師、教師と保護者、教師と地域住民など、多様な「つながり」の場面からである。まずは、子どもと子ども、出発点の問題場面をみてみよう。第1章の「(1)『つながらない』形成的な発問と子どもたちの発言」の箇所である（7ページ）。ここに、著者の問題意識が明らかになっているからである。

授業中の子どもは自分の考えを話すこと、聴くことはよく行っているように見えます。しかし、自分の答えを発表するだけとか、友だちの発言を漠然と聴くだけに終始していることが多いように思えます。このことは、「先生や友だちの話を“聴く”ことができていない」こと、さらに、発表した子どもの内容を生かして「自分の意見を整理して“話す”ことができていない」という2つの側面からとらえることができます。

その手立てとして、著者は「低学年の学習内容がそれほどむずかしくない時期に『人の話をしっかり聴く』などの学習習慣を形成していく必要があります」と指摘している。その形成のためには、「家庭環境としてのコミュニケーション力」が問われることになる。なぜなら、「家庭は教育の最高の場(25ページ)」だからである。

本書は、第1章から第4章までが基本的に「学校の役割」を論じた内容であるのに対し、第5章では、保育園・幼稚園等の就学前教育、家庭、地域との協働で育てるコミュニケーション力を論じているが、その中核には「家庭環境としてのコミュニケーション力」があることによって、本書の一貫した主張になっている。

さて、著者は問題の考察に当たって、常に熟考の中から「3つのキーワード」を取り出すという手法を採っている。その手法を模倣すれば、本書全体を

貫く「3つのキーワード」として、私は「支持的な風土」、「ことばのリレー」、そして「教師の出番」を挙げたい。現場の教員として35年(教育行政3年、管理職18年)の教職生活の中で、著者の一番の思いは「後進の教員の育成」にあったと思っている。

本書中にみなぎる情熱と切歯扼腕は、「子どもの思い」に寄り添うべき教師の側の責務と、教師に必要な知識とスキルを問うものになっているからである。

例えば、つながりのスキルとしての「ショー・アンド・テル」にふれて、「教師の出番は、最後の短い時間です。そのコメントは、子どもがまた話したくなるようなことばを簡潔に話さなければなりません。」と主張する(98ページ)。確かに、「言うは易く、行うは難し」の事柄である。しかし、子どもたちのコミュニケーション力の課題の深刻さに鑑みれば、だれかが言わなければならない。言うべき人、言うだけの確かな学びをした人、それが、著者、桑原さんだろう。本書には、その学びを跡付ける研究者、実践者の言葉が、あたかも宝石箱のごとく散りばめられている。その一つひとつをすくい上げ、その意味と背後にあるものを熟考することが、現在、「教職生活の全体」を通じて求められている「教師としての資質・能力の育成」につながるものと確信している。

[光生館、2015年、2,400円(税別)]

(熊本大学教育学部 古賀倫嗣)